今月の読み物

# 木樹に囲まれて

第 4 班
佐野春好

私は、愛知県の三河で生まれ育ちました。辺りを低山に囲まれ、決して広くはない平地に住宅や耕地が点在する田舎でした。祖父は、幼い私を小学校の休日に自家の山へと連れて行きました。近在の鍛冶屋で誂えた小さな子供用の鉈を専用の鞘に入れ、腰に巻き付け、祖父が曳くリヤカーの荷台に私を乗せ、目的の山に向かったものでした。

子供心に鉈を腰に着けると誇らしい気分になったものでした。見送る母もそんな姿を見つつ不安顔を見せてもいました。

目的の山への入口に着くと、祖父は用意してきた長いロープを取り出し、その端を私の腰に巻き付け、もう一方の端を自分の腰に結び付けていました。このロープに引かれると同時に祖父の大きな声で「大丈夫か」と届き、私も出来るだけ大きな声で「大丈夫だよ」と返したものでした。お互いの安心のための合図で、私からそのロープを引くこともありました。正にタイトロープでした。

山に入ると、永年の落ち葉が堆積しクッションの上を歩いている様でした。祖父は灌木刈りが主で、私は小さな鉈を利き手で握り、行く手を阻む小枝や葉を払いながら上へ上へ登るのが常でした。山の深い闇の先には明るい場所に出るに違い無いと思っていました。それも直ぐにロープが張り詰め戻るのも常でした。

山では小鳥や小動物と出合うこともあり、特に小鳥は暫く見詰めていたこともありました。花木にも会いました。初夏のある日、麓近くの合歓の花の美しさは今も記憶に遺っています。他にも多くの花木と出会いました。

祖父は私によく「内の山には天然木が多い。大事にしないとな」と言っていました。適地適木の中に在って天然木つまり自然木の方が価値が高いという事であろうか。幼い私にはよく解りませんでした。

帰路は、リヤカーに山積みされた焚き木の上に座り、薄暮の土道を往路より一段高い所から眺めつつ、母はどんな顔で迎えてくれるのだろうかと想像もしていました。

山は様々な所に在り、近い山もあれば遠いところも在りました。

持ち帰った焚き木や薪を専用の小屋に納めるとその日を終えることとなります。

お願いし同行した人々の「お疲れ様でした」の声があちこちで響くと一気に安堵感が拡がった感がしたものでした。

この意味では山＝木に極めて身近な環境で過しました。

「木」「林」「森」で、「木」の数の多寡に拠って林や森を表わす日本語は、凄いと感嘆しています。古代、文字を持たなかった我国は中国からの漢字を取り入れ文字としました。口頭発音しか持たなかった日本人の発音に、どの様にして漢字を当て嵌めたのか？と言う疑問を持ちました。

或る書に拠ると、口頭発音していた日本語と中国からの輸入漢字を特定したのは諸説あるようですが、

「口頭発音が先にあり」と「漢字が先にあり」の二説あると書かれていました。

口頭発音で「木」は別にして、「林」は「生(は)やす」を名詞化させて「生(は)やし」からとし、「森」は「盛(も)る」を名詞化させて「盛(も)り」に由来すると説明されています。

この内容から、漢字が輸入される以前には「林」や「森」の口頭名詞は無かったかも知れません。

「木」という漢字と同じ表意している「き」を合致させ「き」と読むとしたとあり、これを訓読みと言い、漢字の「木」は中国語で「モク・ボク」と発しこれを音読みと言うとも記されています。

この他にも膨大な数の言葉を漢字と合致させるには想像を絶する時間と人力とコミュニケーションが必要であったろうと思います。

英語で「森」をforestと著し、扉を意味するdhwerを語源とし、そこから派生して外側を意味するforisに派生しforestが生まれました。「森」は古今東西、未知にして非日常の空間であり、恐ろしい場でもあったことは、グリム童話「赤ずきん」を観るまでもありません。

国内のみならずあらゆる地上で「木」は人間にとって最も身近で最も古く重要な素材であった、あり続けることは周知の通りです。

今現在、世界の各地で森林が開墾されつつあることは残念です。

しかしその一方で、近く開催が計画されている「大阪万国博」会場の巨大リングに象徴されているように再評価と利活用が進行しています。

加えて、二酸化炭素の排出抑制にとっても不可欠な「木」への価値を共有化し、国産木の一層の有効活用と、適地適木を促進し、自然に優しく寄り添う循環性の高い人間社会でありたいと願っています。